

中学 1 年 組 音楽科学習指導案

指導者 椎 木 千 鶴

【本時で目指す子どもの姿】

言葉の抑揚をもとに、どのような音のつながりにすると自分のイメージと近くなるか何度も歌ったりキーボードで弾いたりして、旋律をつくっていく姿。

【具体的な手立て】

第一次で出会わせた曲の、同じ詩の部分を聴かせ、楽譜を提示することで、それぞれの作曲者がその言葉の抑揚をもとに、どのようにイメージして旋律にしたか考えさせる。

1 題材名 言葉の特徴を感じながら、音のつながりを工夫してメロディをつくろう

2 題材のねらい

詩の言葉を何度も繰り返して読んでリズムをつけたり、言葉の抑揚をもとに旋律を考えたりする活動を通して、その言葉から受けるイメージを感じ取って、音のつながり方を工夫して自分なりに旋律をつくることができる。

3 授業の構想

(1) 音楽の好きな生徒が多く、歌唱への取組も非常に積極的である。音楽のもつそれぞれの雰囲気を感じ取りながら、表現する力ももっている。今回行う創作は中学校では初めての活動である。小学校での学習体験は、学校によって様々であり、中には音楽づくりの経験をしたことがない生徒もいる。1年生へアンケートをとった結果、小学校の時に音楽の授業での音楽づくりの経験がある生徒57%、経験がない生徒、または覚えていない生徒43%であった。経験がない生徒に音楽づくりのイメージについて聞いてみると、「難しい」「大変そう」と感じている生徒もいる。一方で、音楽づくりをしたことのある生徒は、音楽づくりが好きかと問うと、とても好き、好きと答えた生徒は82%と、多くの生徒が肯定的に感じている。その理由として、次のように書いている。

- ・可能性が無限大にあるところ。
- ・グループの人と協力できたり、新しい音楽ができたりしてうれしい。それと、他のグループの音楽を聴いて、意外性があるとおもしろいから。
- ・音楽で自分を表現できるところ。自分らしさを出せるところ。

このように、音楽づくりの経験がある生徒は、創作でしかできないよさを感じ取っていることがわかる。また、他の人の作品からよさを見つけたり、協力したりすることで新しいものができる喜びも知っている。

中学校で初めての創作活動であることや、これまでの体験に差があることを踏まえて、今回の題材を設定した。言葉のリズムや抑揚を手がかりに音のつながり方を試して、自分なりの旋律をつくらせたい。記譜については、授業で楽譜を書き写す活動も取り入れているが、楽譜作成ソフトを使うなどして、自分で記譜をするのが難しい生徒も苦手意識をもたずに自分で旋律をつくることを行わせたい。グループ活動では、他の人の意見も取り入れながら、より自分の

イメージに近いものをつくっていく姿を求めたい。

(2) 本題材は、学習指導要領のA表現(3)ア「言葉や音階などの特徴を感じ取り、表現を工夫して簡単な旋律をつくること」に関連させながら学習を進めていく。

最初に同じ詩(金子みすゞ「わたしと小鳥と鈴と」)の違う作曲家(1曲は中田喜直、もう1曲は石若雅弥)による歌と出会わせる。この詩は、様々なところで取り上げられる機会があり、多くの生徒にとって馴染みがあると思われる。また分かりやすい言葉で書いてあることから、聴くときに内容がイメージしやすいと考え、選んだ。比べて聴くことで、どんな違いがあるか、音楽を形づくっている要素と結びつけて感じ取らせる。聴くときには、まず曲全体を聴いた後に、ある言葉の部分を抜き出して聴かせ、同じ言葉なのにリズムや旋律などが違うことに気づき、そのことからどのような雰囲気になっているかを考えられるようにする。同じ詩であるのになぜ違うものになるのか生徒が気づき、次の自分の創作へとつなげていけるように支援していきたい。

創作の場面では、言葉を繰り返し読むことで自分なりのリズムを見つけたり、抑揚をもとに何度も歌ったりキーボードで弾いたりして、自分なりの旋律を見つける姿を「自己との対話」、グループで自分のつくった旋律を聴き合ったり、よさを認め合ったり、アドバイスをしたりする姿を「他者との対話」、同じ詩の違う作曲家による歌を聴いて、曲の雰囲気と音楽を形づくっている要素を関連させて聴く姿を「作品との対話」とする。それぞれの場面で、問いが生まれると予想する。

今回は、二つの短い詩(まど・みちお詩/「いちばんぼし」より抜粋/いちばんぼしがでたうちゅうの目のようだ)(まど・みちお詩/「ゆきが とける」より抜粋/すいしゃが こっとな こっとな ゆきが とける)の中からどちらかを選んで、その詩を用いて一人一人が4小節の短い旋律をつくらせる。旋律をつける詩を提示し、最初に詩の言葉のもつリズムや言葉を何度も口に出して言うことで新たなリズムを見つけさせるようにしたい。次に、言葉の抑揚から音の高さを考えさせ、ワークシートに線で音の高さを書き込ませ、旋律へのイメージをつくらせる。本時では、もう一度「わたしと小鳥と鈴と」の一部分を聴いて、同じ言葉であるのに違う旋律になっていることに気づくように、楽譜を提示する。少し音を変えるだけでも旋律の雰囲気が変わること気づくように、「わたしと小鳥と鈴と」の旋律を用いて示したい。その後、キーボードで実際に音を出して歌いながら、旋律をつくっていく。始まりの音から音を1音上げたらどうか、2音上げたらどうかなど、キーボードで音を出しながら声にして歌ってみることで、自分のイメージに近づけていけるようにする。また、4~5人のグループで活動を行うことで、お互いに聴き合いながら、よさを見つけたり、アドバイスをし合ったりして、そのよさなどを自分の作品に取り入れることで、自分なりに工夫して表現していく力を育みたい。

最終的に、楽譜作成ソフト「フィナーレノートパッド」を使って記譜をさせる。楽譜を読むことや書くことが難しい生徒にとって、比較的容易に作業を進めることができる。また、自分がつくったものをすぐに音にして聴いて確認することができる。自分の作品をその都度聴いて確かめることで、この場面でも「自分のイメージとは違う」「もっとこうしたい」と、自分の作品をよりよいものにしようとする追求することができると思う。

この題材を通して、自分のイメージと音楽を形づくっている要素(リズム、音の高さ)をかかわらせて旋律をつくる力を養うとともに、自分の思いを音楽にできる楽しさを感じさせたい。

4 展開計画（全5時間 本時3／5）

次	時	主な学習と具体的な学習・活動	◇追求する子どもの姿
1	1	○音楽による雰囲気の違いを感じ取ろう。 ・同じ詩に違う旋律がついている歌を聴かせる。比べて聴くことでどんな違いがあるか感じ取る。音楽を形づくっている要素と結びつけて考える。	◇同じ詩なのに、なぜ雰囲気が違うのかリズムと旋律から考えようとする姿
2	2 ③	○言葉の特徴からリズムを考えたり、抑揚から音の高さを考える。 ・旋律をつける詩を読んで、自分なりの思いやイメージをもつ。 ・何度も詩を読んで、言葉のリズムを考える。 ・言葉の抑揚を感じ取り、音のつながり方を考える。 ・キーボードで音を出して歌いながら、旋律を考える。	◇繰り返し言葉を口に出して、その言葉に合うリズムを見つけようとする姿 ◇言葉の抑揚と音がどのように結びつくか何度もキーボードを弾いたり歌ったりする姿
3	4 5	○自分の考えたリズムや音の高さをもとに、旋律をつくる。 ・フィナーレノートパッドの使い方を覚える。 ・自分がワークシートに書いた音のメモをフィナーレノートパッドで楽譜にしていく。 ・友だちの作品や意見を参考にして、曲の手直しをしていく。 ・出来上がった作品を鑑賞し合う。(グループ、全体)	◇楽譜にしたものを聴いて、イメージと違うところをリズムを変えたり、旋律を変えたりする姿 ◇友だちの作品を聴いて、よさを見つけ、自分の作品に取り入れようとする姿

5 本時の学習

(1) ねらい

言葉の抑揚をもとに、音のつながり方を考え、何度もキーボードで音を出しながら歌い、自分のイメージに合う旋律ができるように創意工夫する。

(2) 展開

学習場面と子どもの取組	教師の支援と願い・評価
1. 本時の学習の見通しをもつ。	・本時の見通しがもてるように、本時の流れを提示する。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> 言葉の抑揚をもとに、音のつながり方を工夫してメロディを考えよう。 </div>	
2. 1時間目に聴いた曲「私と小鳥と鈴と」の一部分を聴き、それぞれの作曲者がどのような工夫をしたか見つける。 ・①は1音しか上がっていないのに、②は4音も上がっていて、気持ちが盛り上がっているように聞こえる。 ・①は最後で急に音が下がって、言葉の意味から静かな雰囲気を出している。	・言葉と楽譜を提示し、それぞれの作曲者が抑揚をどうとらえ、旋律と結びつけていったかを考えられるようにする。
3. 「私と小鳥と鈴と」の旋律を少し変えたものを聴き、どんな風に雰囲気が変わったか感じ取る。 ・もとのメロディは落ち着いた感じがしたのに、少し音が高くなると明るい雰囲気になった。 ・最初は続く感じだったけど、音を変えたら曲が終わる感じになった。	・音のつながり方が変わることで、いろいろな旋律のパターンができることに気付けるようにするために、「私と小鳥と鈴と」の一部分を音を変えるとどんな雰囲気になるか考えさせる。

4. 自分が書いた抑揚をもとに、キーボードで弾いたり歌ったりして、音のつながり方を試す。

- ・最後に向かって盛り上げていきたいから、最初は低い音から始めよう。
- ・最初は抑揚に合わせてレ→ミとしていたけど、ファ→ミの方が旋律として自然な感じがする。

5. ワークシートを見せながら、どのような旋律をつくったか発表する。

- ・3小節目で盛り上げて、4小節目を終わる感じにしたかったので、3小節目のこの言葉を特に高い音にした。
- ・抑揚では下がるようになっているけど、その後のメロディとのつながりを考えて、音を高くした。

6. 本時を振り返る。

- ・リズムだけでなく、音がつくことによって自分のメロディがだんだんできてきてうれしい。
- ・Aさんのメロディは抑揚にびったりではないけれど、詩の大事なところを伝えようと一番高くしていて、よく伝わってきた。自分も詩のどの部分を大事にしたいか、もっと考えたい。

- ・抑揚と全く同じ音型にするのではなく、旋律にしていくなにもっと自然な感じになったり、曲を盛り上げたりすることができることを伝える。
- ・4～5人のグループで活動することで、お互いにつくったものを聴き合い、よさを見つけて自分に取り入れたり、アドバイスをし合ったりできるようにする。

- ・まずグループの中で発表し合い、お互いのよさを伝え合う。
- ・全体発表の最初に音のつながりのどういうところを工夫したか、つくった生徒に発表させ、聴く視点を与える。
- ・発表した後に、抑揚や音のつながり方とどう関連しているか、特徴的なところを捉えて生徒に聞き、その生徒のイメージや思いを全体で共有する。

— 評価の観点（音楽表現の創意工夫） —

違う作曲者による同じ詩の歌の一部分を参考にして、自分のイメージを表すためにどうしたらよいか言葉の抑揚をもとに音のつながり方を工夫して、試行錯誤して旋律をつくっている。

【評価方法：観察・発言・作品・ワークシート】